

授業観の転換！ 学びのすそ野を広げて

2020年代を通じて実現を目指す学校教育を「令和の日本型教育」とし、「すべての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学び」としています。ここでは、ICTの効果的な活用ときめ細やかな指導体制で、「個別最適な学び」と、「協働的な学び」を一体的に充実することを目指しています。

北斗市では、急激に変化する社会で活躍できるよう、全小中学校と教育委員会が連携・協働しながら教育活動の充実を図ってきました。特に、校長会と教頭会が中心となり、「北斗市学力等向上プロジェクト」を組織し、「北斗市学力等向上研修会」を年2回実施。また、授業改善の方向性を探るべく、先進校への視察研修も2回実施し、教職員への情報提供や共通理解の取組を行ってきたところです。

さて、これからの時代では、自分が経験したことのない場面や状況にあっても、課題を発見し、周りの人と協働しながら解決に向けて判断、そして考えを表現していく力が求められています。

今までは、決められた教室で、黒板とチョーク、ノートと鉛筆で、「一律の目標と内容」「一律のペースで、一斉に」、そして「受動的に」学んでいました。

これからは、場所や学年、時間の制約を受けず、一人一台端末と目の前にある教材を組み合わせ、「一人一人違う目標と課題選択」「多様な内容を自分のペースで」「個別・協働的に」「主体的に」学ぶことが主流となります。

現在、北斗市の研修活動で学んだことを実際の授業で実践してみようと、多くの先生が「新しい授業スタイル」に挑戦しています。保護者の皆さまの中には、授業参観の時に使う教材や教具、授業の進め方、子供たちの様子等、「昔とずいぶん変わった。」と感じた方も多いはずです。この活動を通して、子供たちの自ら学ぶ姿が、将来大人になって就職した後も、主体性を発揮して働き、人生を切り拓く力につながっていくと思います。

今後「すべての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学び」の下、子供たちに寄り添い、学びのすそ野を広げられるよう「オール北斗」で取り組んでまいります。



(北斗市教頭会 石別中学校
教頭 岩本 宜之)

疲れ目にご用心

「目は口ほどにものを言う」「百聞は一見にしかず」「目は心の鏡」など、目を使ったことわざはたくさんあります。これらのことわざにある目。みなさんはいくつを想像しますか？

北斗市学校保健会が毎年作成している『令和4年度 北斗市児童生徒の健康第17号』によると、視力が1・0未満の割合が小学校で54・5%、中学校になると73・9%となっております。すなわち、小学生の2人に1人、中学校では4人に3人が視力1・0未満ということになります。これだけでも大変なことだと思えます。これだけでも大変なことだと思いますが、全国と比較するともっと深刻な状況だということが浮き彫りになります。

小中学校のいずれも過去最多となり、毎年のように増加傾向となっております。視力1・0未満の児童が全国より10%以上も上回っている北斗市の現状を考えると喫緊の課題と言えます。

	小学校	中学校
全国	37.8	61.2
北斗市	54.5	73.9
差	▲16.7	▲12.7

【視力1.0未満の児童の割合】
(文部科学省 令和4年度学校保健統計調査より)

タブレットを活用して学習を進めていくことが増えている教育環境の中で、目の負担をいかに減らしながら活用していくかが重要となり、そのためには生活習慣の配慮が必要不可欠となります。

児童生徒の目を守るために、学校ではもちろんですが、家庭でも次の点に気を付けてタブレットを活用しましょう。

- ①姿勢を正して、画面から目を30cm以上離しましょう。
 - ②30分画面を見たら1回は、20秒以上遠くを見て、目を休めましょう。
 - ③目が乾かないように、よくパチパチとまばたきをしましょう。
 - ④休日は、明るい屋外でからだを動かしましょう。
 - ⑤寝る1時間前からは、画面をみないようにしましょう。
- (日本眼科医会 標語ポスターより)

鬼の目にも涙で大目に見ていると、後で大目玉を食うことに。目に入れても痛くないくらいかわいい目をした子どもたちのために、抜け目なく、目くらまを立てながら守ってあげるのも一置かれる大人の在り方ではないでしょうか。



(北斗市学校保健会
萩野小学校 教頭 長島 幹伸)